松の山家と申は、無佛世界の所にて、女なれ共はこねをつけず、色をかざる事もなければ、ましてかゞみなど申物をもゑらず候ひしを、某一年都に上りし時、鏡を一面買とりて、かれが母にとらせて候へば、世になき事に悦び候ひしが、今はのとき、姫を近付、我を戀しく思はん時は、此鏡を見よと申しほどに、我影のうつるを見て、はゝとおもひ歎く事の不便さは候、いや〳〵所詮鏡の謂を語つて、歎をとゞめばやと思ひ候、やあいかに姫、總じて鏡といふ物には、何にてもあれ向ふ物の影の寫るぞとよ、○下略

〔續狂言記 三〕土產の鏡

シテ 是は越後の國、松の山家の者でござる、某訴訟の事有て、長々在京いたひてござる、此度そせう相叶ひ、滿足仕た、急で國へ罷下り、女子共によろこばせうと存る、○中略 何ぞみやげを調へて、○中略 とらせたふ存たれ共、○中略 なりませなんだ、○中略 急候程に、これはは、國本に著た、女共をよび出さふ、女共はうちにいるか、某が上方より、今もどつたはよふ出さしめ、女 是の人のこゑがするが、おもどりやつたかしらぬ、シ 女共今くだつたは、女 やれ〳〵うれしや、○中略 シ それに付て、たまたま都へ上つたことじやほどに、何ぞみやげ物をとゝのへてくだりたふ思ふたれ共、長々の在京なれば、左樣の物をも、調ふることならなんだ、○中略 シ 去ながら、そなたには、めづらしき物を、もとめてくだつておりやる、女 それはうれしい、何といふ物でござるぞ、シ 其ことじや、鏡といふ物じやが、是は昔は神々の寶物で、人間の持物ではなかつたけれ共、今は人間のたしなみ道具となつて、都では、いかやうのいやしき者迄も、是をもつ、其子細は、先此鏡といふ物を、我前に立てみれば、我かたちの善惡が、目の前にうつりて見ゆる、去によつて、あるひは、女は顏に白粉をぬり、べに、かねを付て、かたちをかざる、わごりよ達は、みたことも有まいとおもふて、もとめて來た、これ見さしませ、女 それはうれしうござる、其樣な重寶なものは、終に聞たこともござらぬ、先是へ見せ